

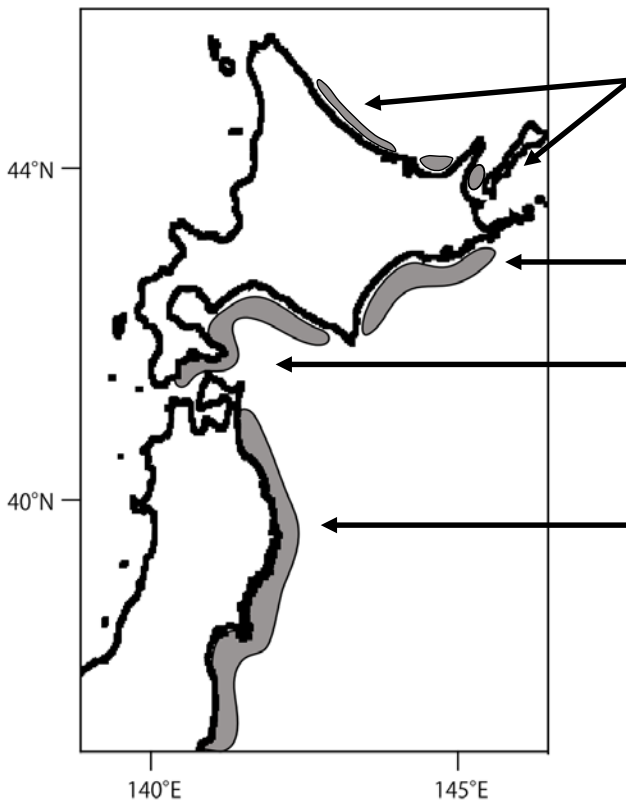


平成28年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（平成28年10月～12月）のポイント

常磐海域～オホーツク海におけるスルメイカの来遊量は、津軽海峡～道南太平洋海域を除き、前年を下回る。海域別の予報については以下の通り。



根室海峡～オホーツク海：

来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並。

道東太平洋海域：

来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並。

津軽海峡～道南太平洋海域：

来遊量は前年並。
魚体は、前半は前年より小さく、後半は前年並。

常磐～三陸海域：

来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 北海道区水産研究所

担当：業務推進部 大迫、塚本

資源管理部 伊藤、岡本

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成 28 年度 第 2 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2016年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：主に冬季発生系群（2016年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：10月まで漁場形成される。
- (3) 魚体：前年並。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体：前年並。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前半は前年より小さく、後半は前年並。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

I 予報の説明

2016年8月～9月に実施した漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター）と道東太平洋スルメイカ資源調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場）の結果、および7月～8月（一部9月含む）の漁況の経過を主要な情報として10月～12月における来遊量を予測すると、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域、常磐～三陸海域では前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域では前年並と予測される。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）での7月～8月の小型いか釣り船CPUEは前年を下回り（表1）、道東太平洋スルメイカ資源調査によるCPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）も前年を下回った。以上のことから、本予報期間における道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される。近年、道東太平洋海域における漁獲量は11月には大きく減少することから、主漁期は10月で終了すると予測される。魚体の大きさは、道東太平洋スルメイカ資源調査結果、および9月に釧路港に水揚げされた漁獲物の生物測定結果（表1）から前年並と考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東太平洋スルメイカ資源調査による釧路以東のCPUE、7月の国後島南東の海表面水温（気象庁資料）、および釧路港での8月までの小型いか釣り船CPUEを用いた漁獲量予測結果（北海道立総合研究機構釧路水産試験場資料）から、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される。主漁期は前年と同じ11月になると予測される。釧路以東で漁獲された個体は少なかつたため、魚体の大きさの予測には釧路以西での調査結果、および9月に釧路港に水揚げされた漁獲物の生物測定結果（表1）も利用した結果、本年は前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡周辺における漁場一斉調査のCPUEは前年を上回った。函館港での8月の小型いか釣り船CPUEは前年を下回ったが、直近の9月上旬のCPUEは前年を上回った（表1）。また、浦河港での8月の水揚げ量は前年を大きく上回った（表1）。一方で、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される（前述）。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年並と予測される。魚体の大きさは、漁場一斉調査の結果から前半は前年より小さく、後半には前年並になると考えられる。

4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。常磐～三陸海域において漁場一斉調査による漁獲はなく、青森県白糠以南における7月～8月の小型いか釣り船CPUEは前年並～下回ったことから（表1）、常磐～三陸海域に分布する群は前年を下回ると考えられる。また、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される（前述）ことから、常磐～三陸周辺海域への来

遊量は前年を下回ると予測される。同海域では漁場一斉調査による漁獲が無かったが、道東太平洋海域での調査結果から、魚体の大きさは前年並になると考えられる。

II 調査結果

8月に実施された第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果(図1)、道東太平洋海域(42° N以北、143° E以东)の平均CPUEは0.3尾であり、前年(4.9尾)を下回った。三陸周辺海域(41° N以南、143° E以西)での漁獲はなく、前年(0.9尾)を下回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域(41° N以北、143° E以西)の平均CPUEは4.7尾であり、前年(3.2尾)を上回った。調査海域全体では1.5尾で、前年(2.4尾)を下回った。

調査船調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが20cmにある単峰型の組成で、前年(21cm)並であった。海域別に見ると、道東太平洋海域ではモード20cmで前年(21cm)並、三陸海域では漁獲なし(前年:17cm)、津軽海峡～道南太平洋周辺海域ではモード19cmで前年(21cm)よりやや小さかった(図2)。

III 各海域の漁況経過

2010年以降の太平洋(根室海峡～オホーツク海を含む)における年間漁獲量*は10万～16万トンで推移していたが、2015年には77千トンに減少した(図3)。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。

2016年7月～8月の太平洋沿岸域での漁獲量(生鮮:速報値、一部未集計)は5.7千トンで、前年(12.3千トン)を下回った。そのうち、道東太平洋海域では0.2千トンで、前年(4.3千トン)を下回った(図4)。常磐～三陸海域での漁獲量は4.6千トンで前年(6.0千トン)を下回った(図4)。津軽海峡～道南太平洋海域の漁獲量は0.9千トンで前年(2.0千トン)を下回った(図4)。根室海峡～オホーツク海での漁獲は前年同様なかった(図4)。千葉県以南の海域での漁獲量は40トンで前年(60トン)を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

*主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の漁獲量で引き延ばしているため、図3および図4を含めた漁獲量は全て推定値である。

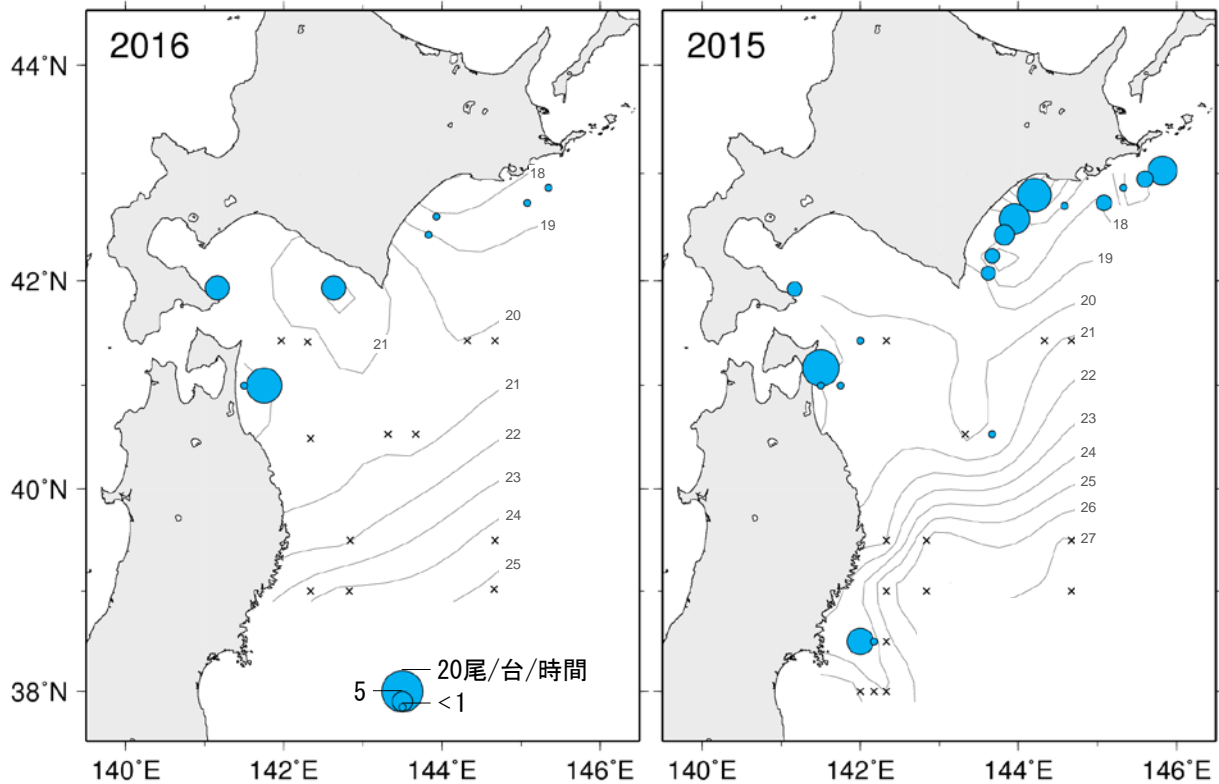


図1. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果
 2015年8月（右図）、2016年8月～9月（左図）のいか釣りによるスルメイカのCPUE（い
 か釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す。
 ×は漁獲が無かった点、実線は調査船での観測結果に基づいた海表面水温の等温線
 を示す。

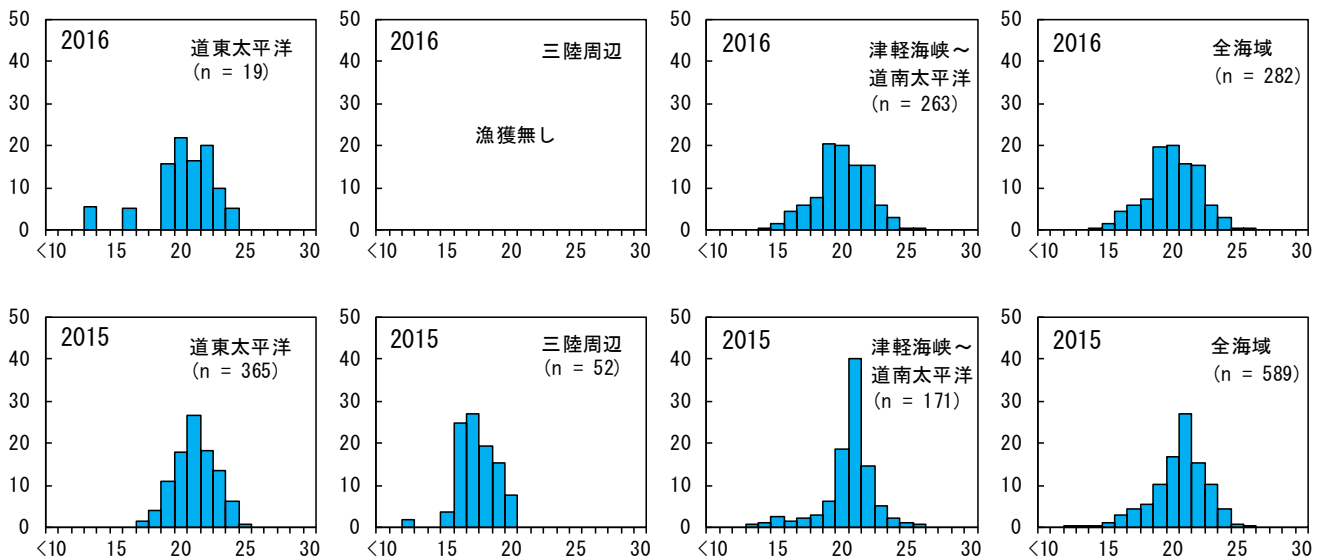


図2. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査による外套背長組成の結果

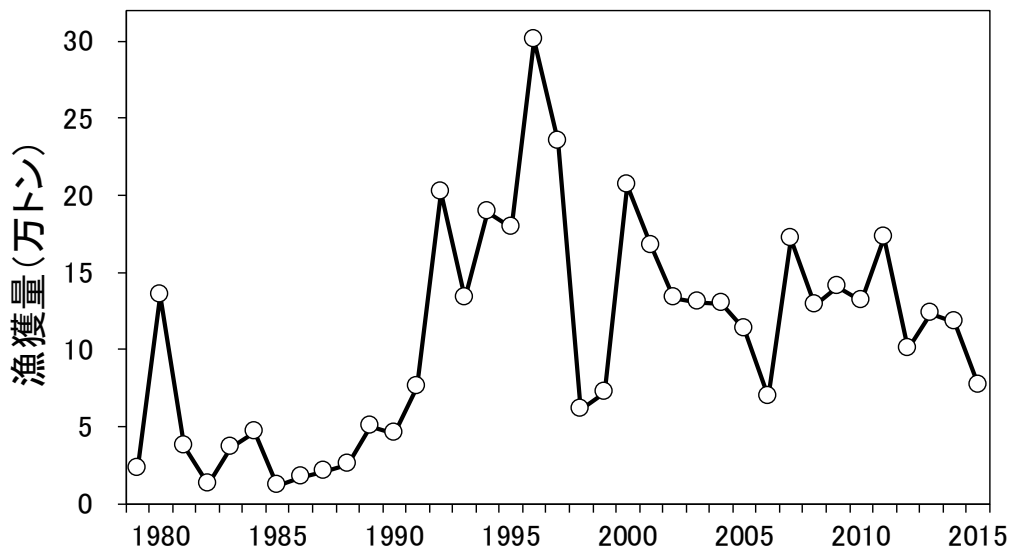


図3. 太平洋におけるスルメイカの漁獲量の年推移（集計値は暦年）

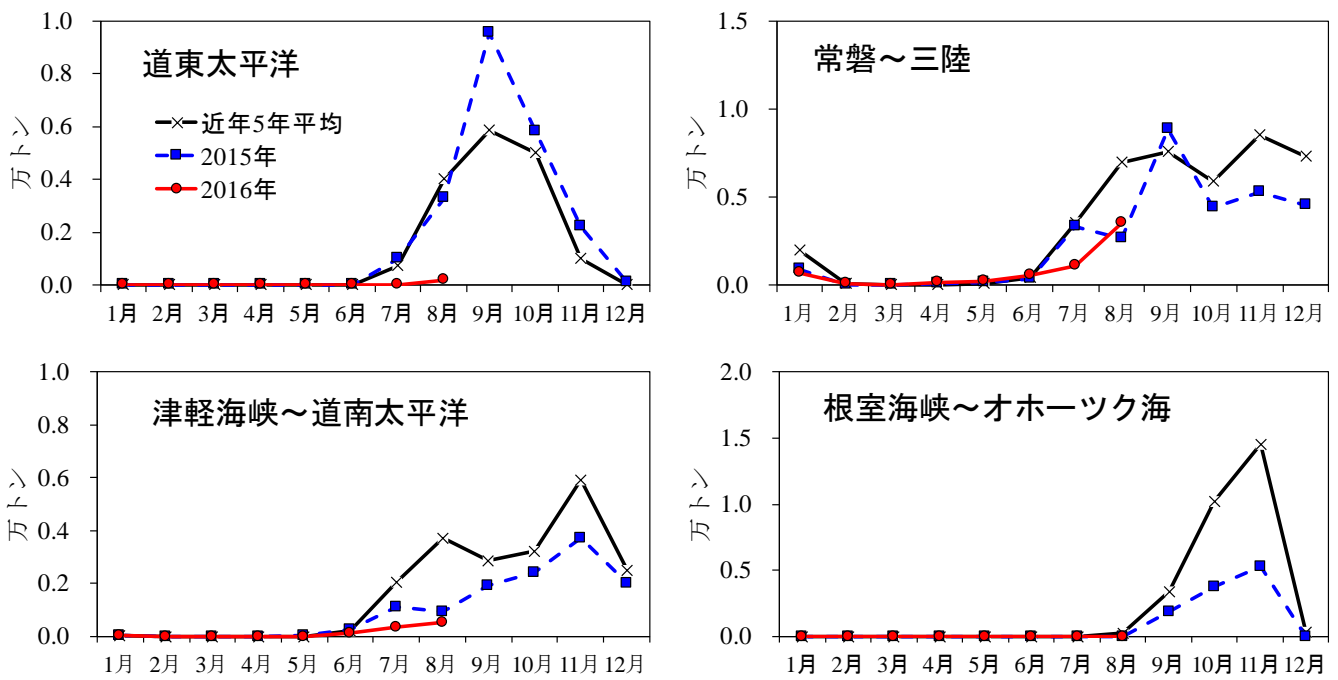


図4. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）

近年5年平均は2011年～2015年の平均

（釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過 (2016年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）での釣りによる7月～8月の水揚げ量は335トンで前年比8%、CPUEは前年比46%であった。 9月中旬に釧路港に水揚げされた漁獲物の生物測定の結果、外套背長組成は前年並であった。
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚げ量は48トンで前年比59%、CPUEは前年比56%であった。 なお、直近の9月上旬のCPUEは前年比139%であった。 浦河港での釣りによる8月の水揚げ量は198トン（前年比1282%）であった。 南茅部での定置網による7月の水揚げ量は50トン（前年比295%）であった。
青森	大畑港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は107トンで前年比42%、CPUEは前年比55%であった。7月～8月の白糠港、八戸港における釣りによる水揚げ量は、それぞれ167トン（前年比77%）、715トン（前年比85%）であった。CPUEは、白糠港では前年比83%、八戸港では109%であった。八戸港へのまき網による7月～8月の水揚げ量は2,366トンで、前年（3,527トン）を下回った。
岩手	岩手県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は402トン（前年比186%）で、CPUEは前年比44%であった。定置網による7月～8月の水揚げ量は171トンで前年比100%であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は8トン（前年比770%）で、CPUEは前年比137%であった。定置網による7月～8月の水揚げ量は45トンで前年比154%であった。
福島	この期間の水揚げはなかった。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	千葉県主要港での釣りによる7月の水揚げ量は3.7トンで、前年（0.1トン）を上回った。 CPUEは前年比440%であった。
神奈川	三崎港での釣りによる水揚げは前年同様に無かった。
静岡	静岡県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は14トンで（前年比133%）、CPUEは前年比88%であった。
三重	三重県主要港でのまき網による7月の水揚げ量は0.6トン（前年比22%）であった。定置網による7月の水揚げ量は0.1トン（前年比373%）であった。
和歌山	和歌山県主要港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は6.4トンで、前年（0.3トン）を上回った。
高知	高知県主要3港での釣りによる7月～8月の水揚げ量は4トンで、前年（21トン）を下回った。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	